



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

地域の皆様の「いざという時」のために

「赤十字に期待する活動は？」—— 昨年、1万人を対象に全国市民アンケートを行い、赤十字に期待されている活動をお尋ねしたところ、最も期待が高かったのは「大きな災害や事故時の医療救護活動」で、6割を超えています。

日本赤十字社では、全国に展開する支部や赤十字病院、血液事業等を通じて、国民の命と健康を守るために日々活動していますが、「いざという時」に備えては、医師や看護師などから成る救護班を全国に常備し、その研修や訓練を重ねています。昨年も国内で発生した9件の災害に対し、救護班の派遣や救援物資を配布し、東日本大震災義援金を含む50億円以上（平成26年12月末現在）の義援金を受け付け、被災者に届けさせていただきました。全国には、その活動を支援して下さる赤十字奉仕団やボランティアのネットワークがあり、被災者に寄り添った活動をより充実していくことにしています。

また、地域の住民がお互いに助け合うことができるよう、応急手当や防災・減災の講習を常時行うとともに、災害時に子どもたちが、自分の命を自分で守ることができるようにとの願いから、新たに学校での防災教育プロジェクトを始め、全国に広めています。

一方、海外でも昨年は多くの災害、紛争、エボラ出血熱等感染症の発生があり、日本赤十字社はその救援のために7ヶ国に人材を派遣し、派遣国を含めた31ヶ国に対して3億4千万円相当の支援を行いました。こうした活動の財源は、すべて皆さまからのご協力に頼っています。

なぜ、私たちがこうした活動を手掛け、その資金を皆さまにお願いするのか。

それは、戦場で傷ついた兵士達を敵味方の区別なく救護した赤十字の成り立ちに由来します。その対象は今では大きく広がっていますが、苦しんでいる人がいれば、国籍や人種、宗教、社会的地位や政治上の意見などにかかわらず、中立・公平の立場で救いたいと思いつけています。日本赤十字社はボランティアの精神に根差した独立した組織でありたいと考えています。ですから救護活動のための財源も含め、「助け合う社会をつくる一員となってくださる人を一人でも増やすため、より広く呼び掛けてご協力いただく」ことにしてきました。

毎年5月は、1901年に第1回ノーベル平和賞を受賞した赤十字創始者アンリー・デュナンの誕生日5月8日にちなみ、赤十字思想を広めるための赤十字運動月間としています。人は誰しも、救う側にも救われる側にもなります。皆さまには、赤十字を介してそれを結ぶ接点となっていただけるよう引き続きのご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成27年 月

日本赤十字社 社長

近衛 忠輝